

食い荒らされる青い鬼灯

※体験版※

ここは後世に「地獄」と呼ばれる場所だ。今は「黄泉」と呼ばれている。

まだ「地獄」という世界が臃げで、「鬼」と呼ばれる種族が支配し、あてどなく暮らしていた。そんな黄泉の一角、入口が広く奥の深い洞窟に、数人の鬼たちが共同で暮らし、長時間の睡眠から目覚めた鬼の一人が、あくび交じりに呟いた。

「今日はなんだか気分の悪い夢を見たなあ……」

筋肉がこれでもかと全身に巻き付いた大柄な赤鬼が、不満そうに言う。

「そうか、じゃあ、とつと吐き出さねえとな……」

同じように筋肉で肥大した体躯を持つ厳めしい顔の鬼が、含み笑いをしながら指で洞窟の奥を指す。

「へへ、そうだな、吐き出すか・・・」

そう言つて赤鬼は笑い、洞窟の奥へと向かった。

奥にはヒカリゴケが壁と天井に張り付き、明度に心配はない。その明かりに照らされながら洞窟を進むと、奥に白くやわらか気な物体が見えてくる。

「さあ、鬼灯ちゃん、おはよう・・・今日も相手してもらうぜ・・・」

「くっ・・・いい加減に、飽きろっ・・・!」

鬼灯と言われた細身の美少年は、黒髪で額に一本角、長髪を団子にまとめて頭上で一括りにしている。

身体には何も身を隠すものがなく、全裸で、眩いほど白い肌を惜しげもなく晒し、うつ伏せの体勢で両足を大開脚させられている。

臍の位置まで平らな板を敷かれて体を浮かされ、そこから下は宙に浮き、左右が頑丈に拘束されている。いわば、逆「」の字に拘束されていた。

「おらおら、いい加減に減らねえ口だなあ・・・これが欲しかったんだろ・・・?」

そう言つて赤鬼は傍らの壺を持ち上げ、中の液体を、鬼灯の見事な曲線と膨らみを持った双丘に浴びせてゆく。

「ふあっ！あっ！あああっ！や、やめてください！」

液体が鬼灯に付着すると肉の焦げるような音が生じ、液体はたちまち蒸発してあたりは湯気だらけになる。しかし鬼灯は熱がるわけでもなく、ただ無残な恰好のまま身を悩ましくくねらせ始めた。

「くあっ・・・ああ、あっ・・・ああ・・・！」

力なく垂れていた桃色をした鬼灯自身が力を持ち、白い身体が薄桃に染まって小刻みに痙攣をおこす。鬼灯の呼気が熱くなり、目元が赤らんで、瞳は潤み、思考は穢れた欲でかすんでしまう。

「よしよし、効いてきたな・・・そら、目覚めの一発だ！」

「ああああああ！」

赤鬼は鬼灯の柔らかな臀部を鷲掴みにすると、剛直を取り出し、一気に間の窄まりへと身を進ませる。

鬼灯の身体の様子など鑑みない非常な凌辱で、最初から赤鬼は激しく腰を振り立て、二回りほども身体が小さい鬼灯の身体を容赦なく犯す。

「あっ！あっ！あっ！あっ！あっつ！あっつ！あっつ！はっあっつ！」

しかし激しい凌辱を受け、額から汗を飛ばしながら、鬼灯の朱い口から零れる言葉は喜悦の響きだった。鬼灯の長い前髪がバサバサと音を立てて揺さぶられ、激しい蹂躪に快楽の声を上げる。

こんなことで気持ちよくなったりたくない鬼灯だったが、若い身体は性の快感をやすやすと受け入れ、さきほど垂らされた媚薬によって性感神経は狂わされてしまう。

「あっつ！あっつ！あっつ！あっつ！あっつ！」

「はあ、はあ、いい声だぜ、全く、なんで女に生まれてこなかったんだよっ！鬼灯ちゃん！ほんと、可愛いなあ！」

ガクガクと激しく鬼灯を揺さぶりながら、赤鬼が余裕の表情で腰を動かし、鬼灯はすでに口を閉じていなければ舌を噛みそうなほどの激しい揺さぶりを受け、一方的に与えられる激感に泣くような嬌声を上げるだけだった。

「はあ、はあ、ああっ！あっ！ああああっ！あ、あ、あああああっ！」

鬼灯自身からは、すでに三度目の射精が放たれ、ちょうど真下に植え付けられた緑色の植物へ、ふんだんに吹きかけられる。

「よしよし、いいぜ・・・出すから、せいぜいでかい声を出せよ！」

赤鬼の動きがさらに激しくなり、肉のぶつかり合う音洞窟内に耳が痛いほど響く。

「あぐっ！あぐっ！ああっ！あっ！あっ！ああああっ！あっ！ああああー！あー！あーっ！」

突如赤鬼の腰の動きが止まったかと思うと、二、三度しゃくりあげ、鬼灯の中へ精液をふんだんに吐き出す。

(んんっ・・・熱い、頭まで焦げそう・・・)

赤鬼の精液で中出し絶頂を迎えた鬼灯は、指先や角の先まで染み入る声も出せない快感に打ち震える。

「へへ、今日もよかったぜ、鬼灯ちゃん。後がつかえてるから、俺はこれで仕事にいくわ。まあ、せいぜい頑張りな・・・」

「はあ、はあ、ああああ・・・」

鬼灯の頭を大きな掌で撫でると、赤鬼は去っていったが、入れ替わりに同じ巨躯の黄色がかつた鬼が入ってきた。

「おら、鬼灯！俺以外のヤツでイってねえだろうな？イッたら、仕置きだぞ！」

そう言って鬼灯の見事な臀部を両方の手で揉みしだき、わざと感じさせる。

双丘の間から先ほどの鬼に放たれた精液が零れ落ち、無残ながら官能的極まる光景に、鬼は生唾を飲んで激しく体を熱くさせた。

「まったく、ポンポン中出しされやがって・・・情けねえなあ・・・」

(うつ・・・勝手なことを・・・)

鬼灯の四肢は強固な蔦で縛り上げられ、両手は一括りにされて前に引っ張られ、両足はこれ以上ないほど開脚させられ、膝から下に蔦が巻き付き、左右から引っ張って開脚を強要している。

こんなふうに鬼たちに犯されるようになってから何日たったのだろうか？

最初彼らに目をつけられた時、鬼灯は三日三晩犯され続けた。

正体を失った鬼灯を洞窟奥に連れ込み、性処理の道具にし始めてからも、日数が経っている。

周囲の光景に変化がないから時間の感覚がないが、鬼たちが昼夜を示す言葉を時折吐くことを考慮して、一週間はそのままらしい。

三日ほど前から屈辱極まるこの態勢にさせられ、鬼灯は犯され放題だ。

なんとか逃げる方法を模索しているが、度重なる凌辱で疲弊し、鬼に犯されるたびにやってくる、意識がとぶほどの快感のせいで、確信の持てる脱出方法を思いつくことができなかった。

鬼たちが使う奇妙な催淫剤のせいで性感神経を狂わされ、これを塗されると肌が妖しく疼き、刺激されればそれだけで意識が飛ぶほどの快楽が鬼灯を襲う。性的な経験が浅い鬼灯にこの快感は危険な炎で、逃れる術もなく次々と重ね塗りされ、身体は常に疼く状態にさせられている。

「さあ、今日もお花に水をかけてやろうぜ……」

そう言うとき黄色の鬼は長細い壺を取り出して鬼灯に見せつける。中には紫色をした透明の液体がこぼれそうに注がれていて、妖しげな湯気を放っている。

その壺を見せつけられると鬼灯の顔はひきつり、激しくもがき始めた。

「い、嫌だっ！やめてください！それは、いやです！昨日やったじゃないですか！」

「何言ってるんだ、毎日でも、暇さえあればやるんだよ……。その方が感度も上がって鬼灯も気持ちよくなれるだろ？」

「ううっ……ぐっ、嫌だ、嫌だっ……！」

涙目で首を左右に振り、白い身体を震わせる姿は、見る者の加虐心をそそのかすほど蠱惑的だ。黄色の鬼は厭らしい笑みを浮かべ、反応しきった鬼灯自身を驚掴みにすると、液体の注がれた壺の中へ一気に沈めてゆく。

「うぐつ・・・！んああああああああつ！」

また肉が焦げるような音が洞窟内に響き、鬼灯が背中をのけ反らせて大絶叫する。根元までつけられると壺から紫の液体が溢れ、地面に沁みてゆく。

「おらおら、気持ちいいんだろ？この媚薬の効果は知ってるんだ・・・俺も自分に使ったことがあるから、よくわかるぜ・・・？」

鬼は壺をわざと揺らして自身を刺激し、鬼灯をさらに追い詰めてゆく。

「ああっ！あっ！ああああ！熱い、熱い、はあああああつ・・・！」

性感帯の神経全てを炎に炙られているような激烈な快感を受けさせられ、鬼灯はだ喘ぎ、悶えるしかできない。

鬼灯が激感の中で耐えている最中、黄色鬼は、戯れに壺を傾けて薬液を手にとり、会陰や秘孔部分にも塗りこめてゆく。

「ひぐうううっ！うあっ！ああああああっ！」

自身以外でも快楽が弾け、腰から下が焦げそうなほど激烈な快感が生じる。

凜として、鋭利ささえ感じさせられる端正な美少年だが、今は紫の媚薬に翻弄され、遊女裸足の凄絶な色香を放ち、相手を存分に期待させる。

（も、もう無理だ、出したい、ああ、浅ましい、こんなっ・・・！嫌なのに・・・！）

薬液に浸された自身は、液が浸透するにつれてドクドクと激しく脈打ち、射精絶頂の欲求がとめどなく高まってゆく。

どちらかと言うと性的に淡泊な鬼灯が、射精絶頂を焦らされてここまで追い詰められるなど、普段の鬼灯を知る者ならば信じられないだろう。

「おらおら、もうちよつとだ、がんばれ」

そう言って黄色い鬼は壺を上下に動かし、催淫液をちやぷちやぷと鳴らして切なく燃える鬼灯自身を刺激する。

「うあああっ！やめ、やめろっ！ああ、はあああ………っ！」

※中略※

「あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、はああ・・・っ」

覇気のなくなった艶声が洞窟奥に響き続け、時折激しい水音と肉のぶつかり合う炸裂音が空気を震わせ、その場の熱気を上昇させている。

五人の鬼が、小さな体躯の白い鬼を囲み、絶えず淫らな責めを続けていた。

鬼灯は屈辱の大開脚の拘束から解放されたが、地面に降ろされてからは鬼たちに輪姦されっぱなしで、丈夫な鬼の喉が掠れるほどに叫ばされた。

「おら、舌をつかって舐めるんだよ・・・」

「んぐっ、んむ、んん、んぐううう・・・」

小さな鬼灯の口の中へ巨大な肉棒を突き入れ、鬼灯に奉仕を強要するが、すでに意識は朦で、鬼の言葉など耳に入っていないようだった。

口を犯されている間も鬼灯は犯され続け、ガクガクと激しく揺さぶられている。

それでも快感は感じているらしく、鬼灯の身体は反応して、次々と間断なく襲ってくる絶頂感に身を硬くし、快楽を訴えている。

鬼灯自身には緑色の植物が被せられ、上から鬼が手を添えて上下に激しく摩擦している。先端が解放されたその淫具で責められてから、鬼灯自身はほとんど休みなく射精を繰り返していた。

「んふううううっ！んっ！んっ、んっ、んっ・・・」

身体中に自らの白液と鬼たちに掛けられた白濁を浴びせられ、流れ出る大量の汗でも鬼灯の身体は洗浄しきれない。

洞窟の奥には白液が点々と続き、水たまりになった中央に、さまざまな色の筒状をした植物が折り重ねられ、そのどれもが精液をまとっている。

ざっと目で数えただけで20は超えるその残骸は、鬼灯の射精絶頂の被虐の結果だった。

あれから鬼灯は様々な形状の物体で自身を刺激されて、何度も意識を失うほど射精絶頂を強いられた。全体を締め付けられ、イボで責められ、ぬめりのある蔦で摩擦され、吸盤が無数についた植物で責められた。

ありとあらゆる快楽の手管を受け、されるがままに鬼灯は一方的に快感を与えられ、五人の鬼がそろそろで射精絶頂を繰り返し、紅く膨らんだ陰囊がようやく元の形状を取り戻した時には、足元に精液の水たまりができていた。

拘束を解かれて身体が自由になった時には、全身が性感帯となり果て、鬼たちにされるがまま、凌辱を受けている。

「んっ、んっ、んっ、んっ」

鬼灯が動かないので、前髪を掴んで顔を前後に動かし、無理矢理口淫をさせる鬼。

「熱い口だなあ、下だけじゃなく、上も名器かよっ」

鬼灯に無体を働く鬼が、快楽の息を吐きながらその体を称賛する。

「へへ、本当だ！鬼灯ちゃん可愛いし、こっちの締め付けも、ウネウネも最高だ！」

秘孔を犯す鬼が涎を流しながら腰を激しく打ち付け、高速で抜き挿しを繰り返して出し、淫らな水音を立てながら白い身体を揺さぶった。

「そろそろ出してやれよ、鬼灯も疲れてきてるみたいだぜ？」

鬼灯自身を掌で上下に摩擦しながら、別の鬼が笑いながら言う。

「そうだな、そろそろっ！出す、ぜっ！」

犯す鬼は、二回激しく腰を打ち付けると、三度目に鬼灯の腰をかき抱いて覆いかぶさると、絶頂したらしく背中をブルリと震わせた。

「んんんんん——————っ！」

鬼の射精は長い。そして、熱い。灼熱で内部を灼かれる感覚はいつまでたっても慣れず、鬼灯は押し流されるように肛悦絶頂を迎えてしまう。

「よし、こっちも出そうだ」

口を犯していた鬼が、鬼灯の頭を容赦なく前後に激しく動かし、自分勝手に悦を貪り、挿入するときよりも一回り大きくなった剛直をようやく吐き出させると、その美貌に遠慮なく白濁を吹きかけた。

「……………っ！」

すでに白濁まみれになっている鬼灯をさらに白濁で穢し重ね、吐精した鬼は満足げに身を引いた。鬼灯の腰を抱いていた鬼が体を離すと、再び周囲に出来上がった精液の水たまりに鬼灯の身体がビシャッと落ちる。

白濁が周囲に飛び散り、鬼たちは笑いながらそれらを避けた。

「あつ……は……あつあ……あうう……………」

精液だまりに大の字で仰向けに転がされ、蟹股気味に開かれた両足の間から、どくどくと穢れた精液が逆流してゆく。

鬼たちに度重なる中出しをされ、洞内は穢れた体液でひたひたに満たされた。

輝くような白い肢体は全身白濁まみれにされ、時折ヒクつくたびに細頸の先から精液が糸を引いて垂れ、光のなくなった黒瞳からは透明の涙が幾筋もこぼれて、ゾツとするほどの無残美を演出する。

しかし、凌辱されつくし、すでに息も絶え絶えの鬼灯を眺めながら、鬼たちの興味はまだ収まっていないようだった。

「ちよつと休憩させてやるか、その間、体力を回復させないとな・・・」

片目の鬼が赤鬼に目配せし洞窟の入口へと向かわせる。三本角の鬼と黄色の鬼がそれぞれ鬼灯の両手足を掴み、「の字に拘束した。

動きを奪わなくとも鬼灯はすでに立ち上がる力はなく、未だ渦巻き続ける絶頂の余韻で、またもや絶頂するという、絶頂の螺旋に陥っていて、身体を一人、わななかせている。

「今日はまた、新しい快感を教えてやるよ・・・感謝しろよ、鬼灯」

ニヤつきながら言う片目の鬼の言葉に返事もできず、鬼灯は挿入されていないのにずっと絶頂のしつぱなして、快楽に陶醉して返事どころではなかった。

赤鬼が持ってきたのは、片手に収まるほどの壺と、無数の鳥の風切り羽だった。

壺を地面に置くと、さらに色の濃い紫色の液体が浸され、邪悪な雰囲気を放っている。

「いつもは半分に薄めて使ってるからな……これは3分ほど水で割った液で、普段より効き目が強いぜ……?」

※中略※

(植物のようなものなどにつ……！)

もちろん鬼たちに犯されるのも嫌だったが、植物と言う下等な生物に身体を自由にされることなど我慢ならない。

鬼灯は触手樹の様子を見続け、なんとかここから脱出する方法を思案した。

しかし、出口をふさいでいる大岩は、鬼灯の力ではビクともしない。

なんとか割れる隙はないかと模索するが、ヒカリゴケ程度の明度では細部まで把握することができず、気は焦るばかりだ。

そんな鬼灯をあざ笑うかのように、触手が一本素早く伸びて、鬼灯の裸の足首に絡みつく。

「あっ！」

鬼灯が振り払おうと手を伸ばすより早く、二本三本と一気に触手が鬼灯に巻き付き、あつと言う間に触手樹へと引き寄せる。

両腕と両足に触手がギチギチに絡み、すでに鬼灯は抵抗を許されない状態にされてしまっていた。

「あぁっ……ぐっ……！」

必死に力を込めて触手を振り払おうとするが、触手の締めはますます強くなり、肺を圧迫しそうなほどだった。

膝に触手が絡んで両足首をとともも上げられ、M字に開脚させられてしまう。

屈辱の姿勢を取らされ、触手に目がないとわかっていても、鬼灯の顔は羞恥と悔しさで紅くなってしてしまう。すると、ヌルヌルとした触手らしい物体が鬼灯の白い臀部を撫で回し、その割れ目へと到達する。

「うぁっ！あぁ、あっぁっ！」

そのまま秘孔に到達し、入口に粘液を染み込ませようと、しつこく撫でまわし始める。

「くぁっ！うぐっ！ううっ！は、離れろっ……！」

くすぐったさと、知った愉悦がこみあげてきて、鬼灯は焦り、自由になる首を振りたくって抵抗の意を示すが、当然触手は頓着しない。

ヌメヌメと秘孔を中心にして双丘の間をしつこく撫で回され、どんどん鬼灯の身体が熱くなってしまう。それは秘孔から吸収される催淫粘液のせいだとも言えるが、鬼たちに嬲られた名残が残っている鬼灯の身体自身から発せられているとも思われた。

鬼灯の双丘の間を責めている触手は無数の繊毛に覆われているらしく、ヌルヌルとザラザラの感触が重なって鬼灯に伝わってくる。

ゾクゾクとした感覚が背筋を伝い、額から汗が流れてくる。

鬼灯を責めている触手が枝分かれでもしたのか、さらに細かい何かが秘孔の周りをグリグリと突き始めた。

「んぐっ！んんっ、うあああっ！」

触手などと言う下等生物に嬲られているという屈辱と、粘液でどんどん敏感になってゆく身体を認めたくなくて、鬼灯は必死に悲痛な声を上げる。

しかし鬼たちによって責め尽くされた秘孔は、快感を知りすぎていた。細い触手が秘孔の中に侵入し始め、その感覚で全身に鳥肌が立つ。

「うあっ！や、やめ、出ろ、入ってくるなああ！」

しかし触手の責めはそこだけでは終わらず、大きく開かされた両足の間の前面にも及んでくる。先端がインギンチャクのように無数に分かれ、それぞれが気味悪く蠢く太めの触手が鬼灯自身に迫る。秘孔から染み込まされた媚薬のせいで体はすでに発情状態にあり、半分反応を返してしまっていた鬼灯自身を狙い、触手は近づいてゆく。

「うっ！や、やめろ、汚らわしい、触るっ……なっあああ！」

しかしインギンチャク触手は鬼灯自身へ一気に絡み、媚薬粘液を地面に滴るほど分泌させながらゆっくりとした動きで表面を滑ってゆく。

「……っ！」

じわじわと迫ってくる絶対的な快樂だが、一切の抵抗を奪われた鬼灯は、荒い息を吐いて受け入れることしかできない。

ヌルつく無数の触手に翻弄され、鬼灯自身は完全に反応を返し、先端から透明の淫液までたらすほどになつていた。

一本の触手はその先端に目をつけ、鈴口を左右に素早く擦り始める。

「あっああああっ！ああっ！あああああっ！」

突如訪れた許容範囲を超える快感に、鬼灯は首をのけ反らせて激しく喘いだ。

狂おしい快感が下半身で生じ、すぐに極めてしまいそうな愉悅が押し寄せ、ゾクゾクとした快感が胸にせり上がり、鬼灯の口元を緩める。小さく開いた唇から、歓喜の唾液が零れ、鬼灯はそれに気づくことなく快楽に翻弄されてしまう。

(くっ・・・こ、こんな、こんな植物に・・・！)

すでに男の弱点を知っているかのような触手の的確な責めに、鬼灯は艶声をあげ、身もだえるしかできなかった。

秘孔に入り込んだ細長い触手がどんどん体内に侵入し、洞内の奥深くまで到達した瞬間、爆ぜるように一気に灼熱の粘液を大量に吐き出した。

「う、うああああああっ！」

急激に腹の中で灼けるような熱さを感じ、鬼灯はたまらず声を上げる。

そしてその直後、どっと身体中に我慢できないほどの官能が押し寄せ、淫欲が体の中を暴れくるう。

「うっ……うっ……うう……っ」

はあはあと荒い息を吐きながら、鬼灯はなんとか快楽を律しようと努める。

しかし、触手の媚薬粘液は強力すぎた。

いつも鬼に責められるときに使われる強烈な媚薬。あれでも原液を半分に薄めたものだというのに、その原液を一度で大量に注がれ、性感が狂わないわけがない。

鬼灯の身体は我慢がきかないほどの発情状態になり、触手から受ける愛撫を嬉々として受け入れ始めていた。

「ううっ……こんな、こんな……のに……っ！」

しかし意識までは快楽に流されず、植物に嬲られる屈辱に齒を食いしぼる。しかしその強気も、肌の上を触手に撫でられればたちまち霧散してしまうほどに、脆弱だった。

首を懸命に振り立てて快楽の感覚を必死に散らそうとするが、その程度で収まる快感ではないことは、鬼灯自身がよくわかっている。しかし、せめてもの抵抗と、鬼灯は快楽の泥沼であがき続けていた。そんな鬼灯の視界に、長細く舌のような触手が何本もチラつき、一瞬背中から大量に汗が流れた。

舌の形状をしているが、不均等に疣を備えた舌触手が、鬼灯の胸に到達し、白い胸全体を舐めたくる。

「ううっ・・・！」

(か、感じる、こんなに感じるなんて、おかしいです、おかしい・・・！)

鋭い快楽が骨の髄まで届くほどの感覚に見舞われ、鬼灯は上半身を妖しくくねらせる。

その舌触手の先端が、最も感じやすい部位の一つである突起に触れた瞬間、鬼灯の意識は一瞬で白んでしまった。

「はぐうううっ！」

しかし快感はそれで終わりではない。

舌触手は壁の汚れを落とすかのような動きで左右に何度も往復して這い、連続で突起を弾いて鬼灯に休む間を与えない。

「あぐっ！あぁっ！あっ！あっ！あっ！あっ！あぁっ！あっ！あっ！あぁっ！あっ！」

白い喉からとめどなく艶声があふれ、騷られるたびに胸の内に快感が詰まり、鬼灯はどんどん切ない気分が募って、快樂のあまり泣きたくなってくる。

しかし責められているのは胸だけではない。

インギンチャク触手に先端を責められ続けている鬼灯自身でも絶頂が迫り、透明の淫液の量が激しくなってくる。その液体を求めて無数の細い触手が鬼灯自身に絡み、さらに快樂を誘ってしまう、蟻地獄のような快感に陥り、体の中も外も媚薬まみれにされた鬼灯が耐えられるはずもない。

「んぐっ！あぁっ！あぁあぁあぁあ！」

脳天までビリビリと痺れる快感が一気に訪れ、鬼灯自身から白液が勢いよく放たれる。

それを狙って無数のあらゆる形状をした触手が鬼灯自身に向かい、群がり、精液を貪り始めた。

「あああぁっ！あっ！あぐうっ！うあああぁあぁっ！」

一斉にあふれた快感で鬼灯は狂乱状態になる。

腰をガクガクと震わせて射精絶頂中に強い刺激を連続して受け、間もなく潮を吹いてしまう。

その液体にも触手が群がり、鬼灯自身に巻き付いたり、上下に激しく擦り立てたり、つるつるとした無数の触手の頭が先端部分を滑る。

絶頂中で最も敏感になっている瞬間を狙って激しく責められ、どんどん潮吹きがとまらない。

「あああつ！やめ、やめ、うあああつあああつ！」

すると秘孔に挿っていた長細い触手が一気に引き抜かれたかと思うと、秘孔にぼつてりとした質感のあるヌメついた物体が押し当てられ、粘液の滑りに手伝わされ、一気に洞内へと侵入してきた。

「あああ—————っ！」

狭い洞内を無理矢理広げられるヒリつくような感覚と、目の前で火花が散るほどの激しい激悦に、鬼灯がこれまでで一番大きな嬌声をあげた。

洞内に挿りこんだ極太触手は、奥へと侵入を進めながら左右に回転し、表面にまとった小さな疣で内部を荒し回し、声を出すことすら許されない絶感を鬼灯に浴びせ続ける。

「っ……！あつ……ぐあ……！」

※続きは製品版でお楽しみください※